★トランプ政権、ベネズエラの反政府派幹部とクーデター計画を協議

９月８日付の米紙ニューヨーク・タイムズは、「トランプ政権、ベネズエラの反政府派幹部たちとクーデター計画を複数回協議」というタイトルの記事を掲載しました。こうした行為が国際法や国連憲章に違反する、ベネズエラの主権を無視した内政干渉であるとの指摘はないものの、米政府にとって「政治的には逆効果になりかねない」と述べています。記事の内容は次の通りです。

複数の米国政府当局者と協議に参加した一人のベネズエラ軍元司令官によれば、トランプ政権はこの一年間にわたってベネズエラ軍の反政府派幹部たちと複数回の秘密会合をもち、マドゥーロ政権打倒計画を協議した。

ラテンアメリカ中でおこなわれた米国による秘密干渉の長い歴史を考えれば、ベネズエラのクーデター共謀者たちと秘密のチャネルをつくることは、ワシントンにとって大きな博打だった。冷戦時代にキューバやニカラグア、ブラジルやチリといった諸国で反乱やクーデター、陰謀を支援し、軍事政権が犯した虐待に目をつむってきたために、米国にたいする深い憤りが地域の多くになお残っている。

ホワイトハウスは協議についての詳しい質問には回答せず、声明をだして、「マドゥーロ政権下で大変な苦しみを味わっている国に積極的な変化をもたらす」ために、「民主主義への願望を示しているすべてのベネズエラ人たちと対話」をおこなうのは重要である、とのべた。しかし協議に加わったベネズエラ軍司令官たちの一人は民主主義を支援する理想的な人物とはとてもいえなかった。彼は腐敗したベネズエラ当局者として米国政府自身がつくった制裁リストに載っている。彼とベネズエラ治安組織の他のメンバーたちは、広範囲にわたる重大犯罪で、米政府から告発されてきた。そのなかには批判者たちへの拷問、何百人という政治囚の投獄、何千人もの市民への傷害、麻薬取引や、米政府がテロ組織とみているコロンビア革命軍（ＦＡＲＣ）との協力などが含まれている。

米当局者たちは最終的に陰謀者を支援しないことを決定し、クーデター計画はとん挫した。しかしトランプ政権が、西半球で大統領転覆の意図をもった反抗的な軍人たちとの数回の会合をいとわなかったことは、政治的には逆効果になりかねない。

ラテンアメリカのほとんどの指導者たちは、ベネズエラのマドゥーロ大統領がますます権威主義的統治者となり、国の経済を破滅させ、食料と医薬品の極端な不足をもたらしていることで意見が一致している。崩壊によって絶望したベネズエラ人たちの出国が始まり、かれらは国境をこえて抑制がきかない隣国へ流れ出ている。それでもなお、マドゥーロ氏は、米

帝国主義者たちが積極的に彼を排除しようとしていると主張して、自己の支配を長期にわたって正当化してきた。それだけに秘密の協議は彼に攻撃手段をあたえて、ほぼ団結していた地域の反マドゥーロ態勢を崩すことになりかねない。「これは爆弾のような結果になる」とマリ・カルメン・アポンテ氏はいう。同氏はオバマ政権の最後の数カ月間、ラテンアメリカを統括するトップ外交官として働いた。クーデター計画のほか、マドゥーロ政権はすでに数回にわたる小規模攻撃を防いできた。昨年おきたヘリコプターからの一斉射撃やことし８月の演説中におきたドローンによる爆発などだ。これらの攻撃で、大統領は弱いという感覚が増大した。

ベネズエラの軍人たちはオバマ政権時代にも米政府へ直接面会を求めたが、拒否された、と当局者たちはのべた。その時の昨年 8 月、トランプ大統領がベネズエラへの軍事オプションがあると宣言した。この発言は地域の米同盟国から非難を浴びたが、反抗的なベネズエラ軍の将校たちを勇気付けて、彼らは再度米政府に手を差し伸べた。「いまや最高司令官がこういったのだ」。制裁リストに名の載っている元ベネズエラ軍司令官はインタビューでこういった。彼は政府からの報復を恐れて匿名で語った。「これが使者だとするなら、私は疑わない」

海外での一連の秘密会合は昨秋に始まり、ことしも続いたが、そのなかで軍人たちは米政府に、彼らのもとにはマドゥーロ氏の権威主義を嫌っている数百人の軍人たちがいると語った。彼らは米国にたいし、選挙がおこなわれるまで国を統治する暫定政府を樹立する計画を進展させるので連絡を確実にする必要があるといって、暗号通信機の供与を要請した。米当局者たちは物質的な支援をしなかった。計画は反故になり、新たな処罰で数十人の共謀者が逮捕されてしまった。

ベネズエラと米国の関係は何年も緊張してきた。両国は 2000 年以来、大使を交換していない。トランプ氏の就任後、米政府はベネズエラの高官たちへの制裁を強めた。このなかにはマドゥーロ氏や副大統領、他の政府高官たちが含まれている。

秘密会合とそれに先立つ政策論議についての話は、米政府の 11 人の現職および前職の米政府当局者とともにかの元ベネズエラ軍司令官から引き出された。彼はベネズエラ軍内の少なくとも３つの別個のグループがマドーロ政権の転覆を計画していた、と述べた。一つのグループは欧州のある首都の米大使館に近づいて接点を作った。これが米国に報告されると、ホワイトハウスの当局者は興味を示したが心配もした。会合の要請が、米当局者のベネズエラ政府への共謀を記録する策謀ではないかと心配したのだと、当局者は語った。

しかし昨年、ベネズエラの人道危機が悪化すると、米当局者たちは、より明確な計画をもっ

てマドゥーロ氏排除を望んでいる人たち（と関係）を持つことは、危険を冒してもやる価値があると考えた。「多く討論の後、彼らの訴えを聞いてみることで意見が一致した」と、ある米政府現職高官はいった。彼は秘密協議について語る権限を与えられていない。

トランプ政権は当初、老練な CIA（中央情報局）要員で、最近ホワイトハウスのラテンアメリカ政策策定責任者をやめたフアン・クルス氏の派遣を考えたが、ホワイトハウスの法律家たちはより慎重に考えてキャリア外交官を送った方がよいと主張した。複数の高官によれば米使節は「純粋に聞く態度」で会合に臨むよう命令されており、本質的なことはいかなることもその場で交渉する権限はあたえられていなかった。昨年秋に行われた最初の会合の後、その外交官は、ベネズエラ側には詳細で具体的な計画があるようにはみえず、会合に現れて米側から指導や考えを提示してもらうことを望んでいたと報告した、と当局者はのべた。

かの元ベネズエラ軍司令官は、反体制将校たちは米の軍事介入はけっして要請していないと語り、「共同作戦に私は同意しなかったし、彼らも提案しなかった」とのべた。彼と同志たちは昨年夏、政府が国会の権限を停止してマドゥーロに忠実な新議会を発足させたとき攻撃を考えたが、流血への発展を恐れて中止したと述べた。その元高官によれば、その後今年３月にも政権奪取を計画したが、計画は漏えいした。反体制派は最後に、新しい目標期日としてマドゥーロ大統領が再選された５月 20 日の選挙を当てにした。 しかし再び話が表ざたになり、撃ち方やめとなった。

クーデター共謀者たちがこれらの詳細をどれだけ米側と共有していたかは不明だ。しかし反乱将校たちが米側と話をしていたことをマドゥーロ氏が知っていたという兆候はまったくない。元司令官によれば、彼も仲間たちも、どんな策略でも、実行するにはマドゥーロ氏とその他の政府高官たちを同時に拘束する必要があると考えていた。そのためには反乱将校たちが確実に通信できる手段が必要だった、という。彼らはその要求を、昨年おこなわれた２回目の米外交官との会合で行った。米外交官はその要求をワシントンに伝えたが、高官たちはそれを却下したと、米当局者はのべた。「悔しかった」「最後までやりきらないで、待たされた」と、かのベネズエラ元司令官は言った。

米外交官は、クーデター共謀者たちとの３度目の会合を今年早々にもった。しかしベネズエラ司令官や数人の米政府当局者によれば、議論の結果は、物資的支援の約束にならなかった。また米国が反乱軍の計画を承認したという明確なシグナルにもならなかった。それでもベネズエラの計画者たちは、会合で自分たちの計画が暗黙の承認を得たとみなすかもしれない、とワシントン大学安全保障資料室の歴史家ピーター・コーンブルー氏は強調する。「米国は常に政府指導部の変化があるかどうかの情報収集に関心をもっている」「しかしそうい

う会合に米当局者がいたというだけで、奨励と受け取られてもおかしくない」という。

ホワイトハウスは声明で、ベネズエラ情勢を「地域の安全保障と民主主義への脅威」と呼び、「トランプ政権は引き続き、同様の正しい考えをもつ欧州やアジアのパートナーとの同盟を強化し、マドゥーロ体制に民主主義回復の圧力をかけていく」と述べた。米当局者たちはベネズエラの軍部が軍事行動を起こす可能性を公然と語ってきた。当時のティラーソン国務長官は２月 1 日におこなった演説で、「体制変革やマドゥーロ排除を唱えたことはない」と語った。しかし講演後、質問に答えて軍事クーデターの可能性に言及。「事態があまりに悪化し軍事指導者がこれ以上国民のためにならないと認識した時には、彼らがなんとかして平和的な移行を実現するだろう」と述べた。

その後、トランプ政権の対ラテンアメリアカ政策を仕切ろうとしてきたフロリダ州のマルコ・ルビオ上院議員が一連のツイッターで、ベネズエラ軍の反体制派に最高司令官の転覆を呼びかけた。「ベネズエラでは兵士たちがごみ箱をあさり、その家族が飢えているのに、マドゥーロと友達たちは王様のような生活をして人道援助を阻止している」と書いた。さらに「ベネズエラ軍が独裁者を排除して国民を保護し民主主義を回復しようと決心するなら、世界は支持するだろう」とつけ加えた。クルス氏は、ホワイトハウスのラテンアメリカ政策責任者だったことし 4 月のスピーチで、ベネズエラ軍へのメッセージを発し、マドゥーロ氏を「心神喪失者」と呼んで、すべてのベネズエラ人に「軍にたいして自分たちが行った宣誓を尊重し職務を果たすよう促すべきだ」と訴えた。

近年のベネズエラ危機の悪化に伴って、米当局者たちは軍部の反体制派との対話の道を開くべきかどうか賛否の議論をしてきた。「いろいろな意見があった」と、オバマ政権下でラテンアメリカ外交のトップを務めたアポンテ女史はいう。「彼らは安定をもたらし食料配給を助けて、実際にやるべきことをやるだろうという考えをもつ多くの人がいた」。しかし他の人たちは、アポンテ氏を含めて、米政府がコカイン取引と人権侵害の中心勢力とみている軍部の指導者たちとの橋渡しをすることは相当なリスクが伴うと考えていた。

ラテンアメリカ政策でアポンテ女史の前任者だったロベルタ・ジャコブソン元駐メキシコ大使は、米国は長い間、ベネズエラ軍を「腐敗がひどく、麻薬取引に深くかかわった、好ましからざる勢力」みていたが、彼らの一部と裏のチャネルを造ることはやってみる価値あるとの意見だった。「ベネズエラの体制が広範囲にわたって崩壊していることを考えれば、必ずしも合致しないにしろ、どんな民主的解決でも軍部の関与が必要だという思いがあった」という。彼女は今年、国務省を退職したが、「どんなに好ましからざる人たちであっても、ああいうところの関係者から話を聞くのは外交の一部なのです」といった。

しかしどんな理由付けをしようとも、クーデター陰謀者たちと協議をしたことは、悪名高い介入の一覧表を持つ地域に不安を呼び起こしかねない。1961 年、キューバの指導者、フィデル・カストロ打倒を狙って失敗した CIA によるピッグス湾侵攻、米が支援した 1973 年のチリのクーデターは、長期のピノチェト独裁につながった。そして 1980 年代にはレーガン政権によるニカラグアの反政府勢力コントラへの支援があった。ベネズエラでは 2002 年のクーデターでマドゥーロの前任者のウーゴ・チャベスが短期間排除された。後に明らかにされた資料によれば、米国は計画があることを知って、反対の警告をした。それでもクーデターは行われ、ブッシュ政権は新指導部とチャネルを開いた。当局者たちが新政府から離れたのは、クーデターへの国民の怒りが高まり地域の諸国にも非難が高まった後だった。チャベス氏は大統領に復帰した。

直近のクーデター計画では、関係した軍人たちの数は、昨年の 300 ないし 400 人から後退し、マドゥーロ政権による処罰で約半分になった。かの元ベネズエラ軍幹部は、拘束された 150 人余の仲間たちはたぶん拷問をうけているだろうと心配し、米国が暴徒たちに通信機器をくれなかったことを嘆いている。それがあれば国の歴史は変わったかもしれないと思っている。「失望したが、悪感情は少しももっていない。私は囚人ではない」と彼はいった。（了）